

八木健に学ぶ滑稽俳句 6

高橋 素子

だしぬけに咲かねばならぬ曼珠沙華 後藤夜半

恋に身を滅ぼす覚悟曼珠沙華 八木健

今年も畔に土手に、夜半の句の通り、だしぬけに曼珠沙華が群れ咲きました。

師・八木健は「一物仕立て」のつもりで掲出の句を作り送ったが、これを読んだ知人が「取り合わせ」の句として解釈し驚いたと、面白いエピソードを話して下さった。

曼珠沙華散るや赤きに耐へかねて 野見山朱鳥

里山へ延焼中の曼珠沙華 八木健

朱鳥は、己の真っ赤に耐えかねて散る様に見える曼珠沙華の姿を、当時療養生活中で生命を燃焼（赤い色）させ尽くしていた作者自身の姿に重ね合わせて句を詠んでいる。

曼珠沙華は、「彼岸花・死人花・幽霊花・狐花」など、その呼び名は多いが、花の色の燃えるような赤さは実に美しい。葉もなくこの赤い花だけの姿は、遠目には火を点けた様にも、恋の炎が燃え上がる様にも思われる。赤い曼珠沙華が群れ咲く姿は、今正に里山に延焼中の様に見えると、掲出

の句の中で、師匠は詠んでいる。

師に倣って、私も詠んでみる。

死ぬことを実感している枯芒 素子

送る人の名を捜してみたが、「取り合わせ」で読まれると、大変なので止めにする。

今回も古来の名句と師・八木健の句を比較検討してみたい。

大根（ダイコン）引き大根で道を教へけり 小林一茶

大根を地球と奪ひ合あつてゐる 八木健

冬の田舎道、大根畑で、大根を引いている男に道をたずねた。農夫は、引き抜いたばかりの土のついたままの大根で、無造作に方向を示しながら教えてくれた。ユーモアがある句である。一茶の句には、川柳的発想に近いものがかなりあると言われるが、この句にも「ひんぬいた大根（ダイコン）で道を教えられ（柳多留）」という類想の川柳がある。

掲出の師・八木健の句は、自己風刺の決定版ともいうべき滑稽句である。「正直は可笑しい俳句の原点であり、素直に自己風刺することで滑稽句は生まれる」と、師は語る。「大根引」は冬の季語であるが、地球がしっかりと抱えている大根を地球から引き剥がそうという行為は、大根を地球と奪い合う形に他ならないことに、師匠は童の感受性でもって気付いたので

ある。

息白く喧嘩してをる夫婦かな 高浜虚子

吐く息の白きを牛の舌舐める 八木健

「息白し」は冬十二月の季語である。大気が冷え込み、人の吐く息さえ白く見える程の寒さの中、大声を上げ怒鳴り合いしている夫婦喧嘩の情景を、虚子は息の白さだけで面白く詠んでいる。

師・八木健の句は、寒い牛小屋で牛が食べた餌を反芻し、口をもぐもぐ動かしている。余りにも寒いので牛の吐く息が白くなり、その白いかたまりを牛の舌が、まるで舐めているかのように見えるというリアリティーある句である。着眼点がユニークで、面白い滑稽句を形作っている。

木がらしや目刺にのこる海の色 芥川龍之介

木枯は送電線に来て止まる 八木健

「目刺」は春の季語だが、この作品の場合は「木がらし」が主で季は冬とされる。芥川が好んで詠んだ木枯の句の中でも評価の高い一句である。一切のものを枯れさせてしまう木枯と、乾涸びた姿の目刺に残る生きた海の色とを対比させ、名句となっている。

師・八木健の「木枯」の句は、木枯が送電線をビュービュー鳴らしている侘しい冬の景色の中、ふと感じたという。あれは、送電線に木枯がとま

っているのだ・・・と。「俳句に科学は不要である。可笑しい俳句は、感受性豊かな心から生まれるのです」とは、師匠の弁であるが・・・冬枯れの中、見上げる送電線に確かに木枯が・・・と、思えて来るから不思議である。

今年は異常な暑さで、この十月にも東京で桜がまた咲いたとニュースで伝えられたが、「桃の花」にも取り合わせの面白い句がある。

船頭の耳の遠さよ桃の花

各務支考

嘘つきの喉にも仏桃の花

八木健

各務支考の句は、村はずれの渡し場、向こう岸の船頭は老爺であろうか、呼びかけても一向に聞こえない。あたりには桃の花が咲いて、長閑な春景色である。中七の切れ字〈よ〉が利いて、絶妙な取り合わせとなっている。

師匠の句も〈嘘つき〉という俗と〈桃の花〉・〈仏〉という純真なものとの意外な取り合わせで、中七切れの滑稽句の佳句となっている。「嘘つきの喉を観察することで生まれた写生句ですが、喉仏を器官の呼び名ではなく、喉にある仏様と解釈したところが、可笑しさの出発点です」と、師は語る。